

3 ドゥオンラム村の衣生活 —伝統的衣服と現状—

(1) はじめに

調査研究の背景 本調査研究はハノイ都市圏において、都心下町、近郊新興住宅地、都市郊外農村の三地区の生活の実態と変化を比較し、伝統と近代化の調和のとれた都市づくりを目指す研究プロジェクトに位置づけられた「衣生活」に関する分担研究である。本稿では、第一段階の予備調査として、2005年8月17日から19日に実施した都市郊外農村であるドゥオンラム村の現地調査によって得た結果の一部を以下に報告する。

ドゥオンラム村は、伝統的な生活様式が色濃く残されてきたハノイ近郊の典型的な農村集落ではあるが、ベトナム全土で急速に進む経済発展や近代化に伴い、生活全般が大きく変化しつつある。衣生活においてもその傾向は顕著である。

一般に伝統的な衣服あるいは衣生活は、地域の気候風土に適応し、身近で入手できる衣料資源が生かされ、起居動作を含む生活様式とともに育まれた民族特有の美意識や精神文化、技術水準を反映している。しかし、日常的に着用する衣服は着古され襤褸になるまで使い切るのが常であり、保存されにくく、時の経過とともに滅失する運命にある。

これらの過去の衣生活文化を適切に後世に伝えるためには、衣生活全般を有形無形の文化財として位置づけた記録作成の措置が求められる。

調査研究全体の目的 かつてその土地で生活してきた人々の生きた証である着衣とその着装法が如何に観察されるか、まずその現状把握が本調査の直接的課題である。さらにそれは、民族特有の伝統的な衣生活の在り様が如何に推移し、何が現在に受け継がれ、如何なる影響下において何が失われてきたのかという広範な文化変容の解明を目指すものとして捉えておかなければならない。

ドゥオンラム村で受け継がれてきた衣服は、まさに高齢者とともに途絶えつつあり、これらの伝統的な衣生活が消え行く前に現状を詳細に調査し、後世に伝えるための記録・保存が急務と考える。

本調査は、ベトナムの旧習を今日に伝える「衣生活」の記録作成を第1の目的としている。

今回の予備調査の目的と対象 今回の予備調査では、ドゥオンラム村の伝統的な衣服の現状把握のために、日常着および祭礼衣装を取り上げ、そのデータを収集整理し、今後の調査方法の検討を行った。

対象地はドゥオンラム村の旧ミア村4集落のうち、モンフー集落、カムティン集落、ドアイザップ集落とし、衣服調査では農業を生業とするモンフー集落、カムティン集落の高齢者を対象者とした。2004年にハノイ国家大学と共同で実施した「伝統衣服」所在調査に基づき訪問調査を行ったが、訪問調査の受諾者は男性2名、女性4名の計6名で全員が80歳代である。

(2) 調査方法

衣生活の調査項目としては、基本的に以下の8項目が挙げられ、これらに則したデータ収集と整理を行いたいと考える。

(1) 衣服の種類 (2) 衣服の使用目的(日常服、儀礼服、祭礼・行事服) (3) 着用者の種別(年代・性別・職種・階層) (4) 衣服の調達方法 (5) 衣服の繊維素材 (6) 製作技法 (7) 着装法(装身具を含む) (8) 着装の意味・象徴

今回の調査では、対象である高齢者の所有する衣服の実測、着装法の確認、写真撮影、および聞き取りを行った。

(3) 調査結果

ドゥオンラム村の人々の日常着は、男性は年齢を問わずシャツとズボンなどの洋服を着用しており、



図8-15 中年女性の日常着

中・若年層の女性も同様にシャツやブラウスとズボンなどの洋服を着用している。中年女性には上衣は柄物のブラウスに下衣は黒っぽいズボンの組み合わせが多くみられ、ベトナム特有のものとして、上下を共布で作った上衣とズボンの組み合わせもみられた(図8-15)。子供たちは、今日世界的に共通ともいえるTシャツに半ズボン姿である(図8-16)。その中であって、高齢の女性のみが日常着として民族特有の伝統的な衣服を現在も着用している。



図8-16 子供たちの日常着

伝統的な日常着 高齢者の中でも、主に70歳以上の女性が着用するという伝統的な日常着は、イエム(胸当て)の上にアオ・カイン(上衣)を着てクアン(ズボン)をはき、さらに作業や外出の際には、その上にアオ・ナム・タン(五枚はぎの長い上衣)を組み合わせ、腰に帯を結ぶ。外に出る際にはノン(菅笠)を被る。髪型および被り物も特徴的である。

以下にその種類と着装法について述べる。

① イェム (Yem)

Yemは「よだれ掛け」を意味し、女性の伝統的な上半身に纏う下着である。約40センチ角の布を斜

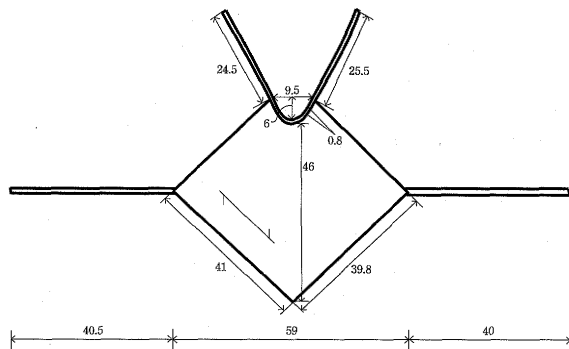


図8-17 イェム

めにした腹掛けのようなもので、上部を衿ぐりとし、2本の紐を首の後ろで結ぶ。両脇の2本の紐は背中

② アオ・カイン (Ao canh)

Aoは「衣」、canhは「羽根・薄い」などの意味で、衿無し、前あきで2個のポケットが付いた長袖の上衣である。生地

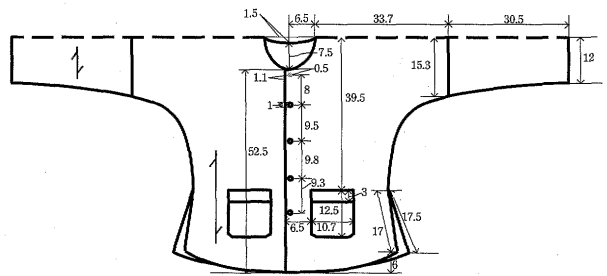


図8-18 アオ・カイン

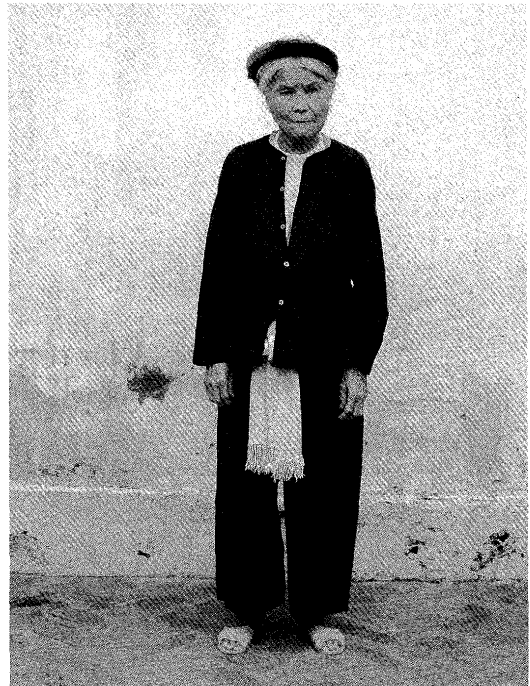


図8-19 高齢女性の日常着
(イエム、アオ・カイン、クアン)

③ クアン (Quan)

Quanは「ズボン」の意味である。脚部から股下にかけて一枚布で裁ち、股下から裾口にかけて矩形の布を接ぎ、4枚の布で構成されている(図8-20)。

股下がバイアスとなるため動きやすく、裾口もゆったりと広いため、夏が暑いベトナムの湿潤な気候に合った形態といえる。両脇に各1箇所2~3cmのボックスプリーツをとり、前後ともに中央の接ぎの部分に小さな三角布をはさむことにより、ウエスト部のカーブがなだらかになるよう工夫されている。前後差はなく、ウエストに通した紐を結んで着装する。布幅を最大限に生かした裁断で、股下のバイアスの取り方に特徴がある。ほとんどが黒の木綿布である(図8-21)。

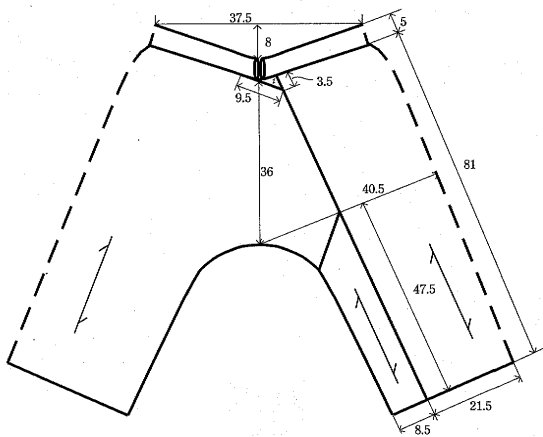


図8-20 クアン



図8-21 高齢女性の日常着
(イエム、アオ・カイン、クアン)

④ アオ・ナム・タン (Ao nam than)

Aoは「衣」、namは「5」、thanは「ピース」で、5つのピースから成る衣の意味である。現代のアオ・ザイ (Ao dai)¹⁾の祖型といわれるもので²⁾、平面構成で身幅がゆったりとした丈の長い上着である(図8-22)。かつては布の織幅が狭く、前後の身頃は二幅を縫い合わせて一枚の身頃としたもので、一幅の右前身頃を下前とし、その上に二幅の左前身頃を合わせる。後身頃と合わせて五幅が必要となることから「五枚はぎの長い上衣」と表記される³⁾。立て衿の衿元から右脇へボタンで留めて着装するが、作業の際など裾が邪魔になる場合はボタンを留めず、下前と上前を結んで着用する。結び方は動作に応じて身体の前あるいは後ろで結ぶ。布幅を最大限に生かした構成法であり、身幅の切り替え線に袖布をつける(図8-23)。ほとんどが茶系統の無地布である。



図8-22 アオ・ナム・タンを着用した女性たち

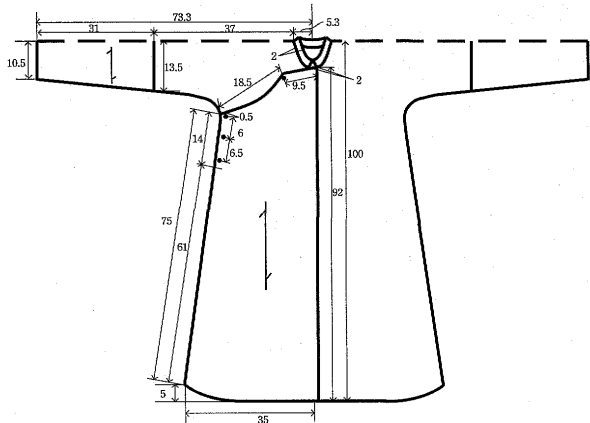


図8-23 アオ・ナム・タン

⑤髪型・被り物

ドウオンラム村の高齢女性には、特徴的な髪型および被り物がある。長い髪を一つに束ね、束ねた髪を一方に紐のついた幅9cm長さ90cm程度の帯状の布で包み、そのまとめた髪を頭囲に添わせて結い上げる(図8-24~26)。帯状布には黒や茶の木綿布を用いる。外出や作業時など状況に応じてその上から黒のカチーフ(頭巾)を被るが、カチーフの被り方には色々なバリエーションがあり(図8-27・28)、嘴のように前頭部を尖らせた被り方には、その形から「カン・モー・クァ(Khan mo qua)」、「カラスの嘴」という名称がついている(図8-29)。装いの仕上げとして外出や作業時には、被り物をするのが伝統的なスタイルのようだが、ベルベットなど高級感のある帯状布を用いて髪を結い上げ、そのまま被り物をしない例も見られる。



図8-24 伝統的な女性の髪形(髪を一つに束ね、芯を巻きつける)



図8-25 束ねた髪を帯状の布で包み結い上げる



図8-26 髪を結い上げた状態



図8-27 伝統的な女性の被り物



図8-28 伝統的な女性の被り物

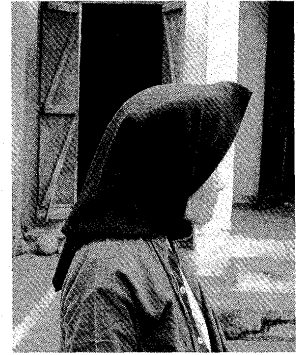


図8-29 伝統的な女性の被り物(カン・モー・クァ)

⑥伝統的な衣服の着装法

伝統的な日常着の着装は、下着である白いイエムの上に、茶系統のアオ・カインを着て、ゆったりとした黒のクアンを着用する。家の中での装いは、イエムとアオ・カインにクアンを組み合わせるのが一般的である。外出や作業時にはその上に茶色のアオ・ナム・タンを重ね、腰に帯を結ぶ。作業の際など裾が邪魔になる場合はアオ・ナム・タンのボタンを留めず、前裾を結んで着用する(図8-30)。長い髪は帯状の布で結い上げ、黒のカチーフを被り、外では菅笠のノン(non)を被る。



図8-30 伝統的な日常着

⑦最も古いアオ・ナム・タン

日常着は継ぎを当て、繕いながら襤褸になるまで使い切るのが常であるため古い衣服が保存されにく

いが、今回の調査で、最も古い日常着として60年以上前のアオ・ナム・タンを観察することができた(図8-31)。それは、現在80歳の女性が結婚の際に着用し、その後も日常的に着用を続けたというもので、アオ・ナム・タンの形態や素材の変遷を辿る上での貴重な資料であると思われる。布幅が約26センチと狭く、前後の裾部では両側に布を足して裾幅を広げる工夫がなされている。袖布も布幅が狭いため、2段階に接いで袖丈を確保している(図8-32)。地色は茶色で、肩には大きな焦げ茶の継ぎ当てがされ、長年の使用をものがたり褪色している。当時は茶色の植物染料しか身近になかったため、日常着には茶色に染色されたものが多いとのことである。

祭礼衣装 モンフー集落とドアイザップ集落のディ



図8-31 60年以上前のアオ・ナム・タンを着用する女性

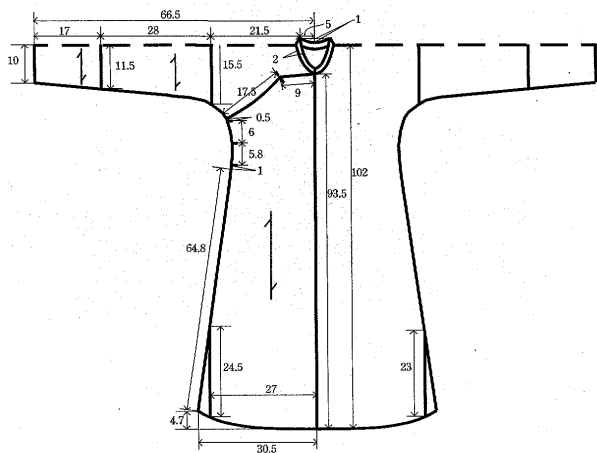


図8-32 アオ・ナム・タン(最も古いもの)

ンで祭礼衣装の調査を行った。祭礼(旧暦正月等)に着用する衣装には、祭の司祭が着用する衣装や神輿の担ぎ手の衣装など数種あり、現在も祭礼に着用しているものと、古くなったため新しい衣装に切り替え、保存されているものがある。新しく調達された衣装は、形態、文様構成など古い衣装を踏まえてはいるが、素材、装飾技法などは簡素なものに変わっている。

以下に主な祭礼衣装について述べる。

・モンフー集落の祭礼衣装

①神輿の先導者の衣装

鮮やかな赤の木綿地に、刺繍やアップリケの装飾技法により吉祥文様が施されている。胸部と背部には瑞雲に乗って正面を向いた四爪の龍、腰部には宝珠を挟んで向かい合う二匹の龍、その下には蝙蝠、裾部は山石と波模様で、波間には二匹の鯉、肩、袖口、前後の腰部には花の丸文が配されている。龍、蝙蝠、魚、雲、波、花などの吉祥文様が絹糸や金糸刺繍により華やかに縫い取られている。地布の赤には健康と幸福など招福の意味があるとのことである。古くから神輿の先導者の衣装には必ず赤を用いるとのことである。表地の赤の木綿布はネルのように起毛した布で、裏地は総裏で茶色の木綿布である。立て衿の衿元から右脇へボタンで留める形態で、着装はゆったりとした白のズボンを組み合わせる(図8-33~39)。

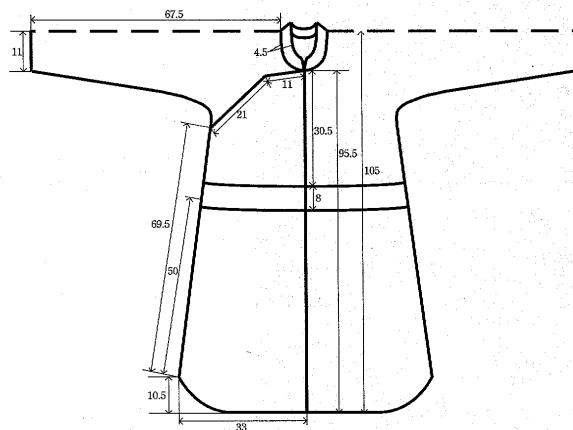


図8-33 神輿の先導者の衣装

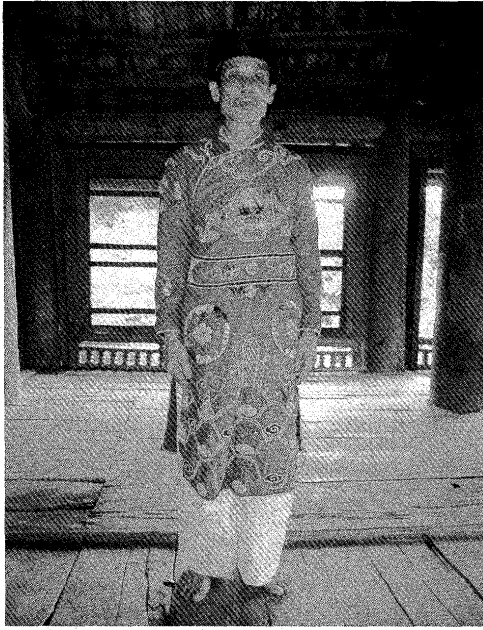


図 8-34 神輿の先導者の衣装



図 8-35 胸部分

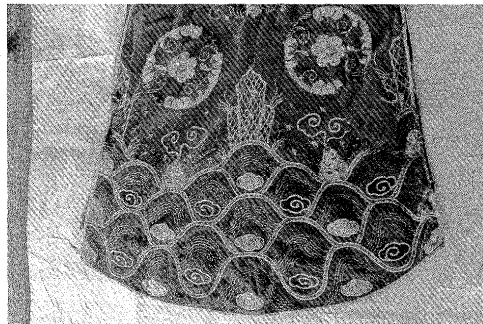


図 8-36 裾部分



図 8-37 後ろ身頃の龍の拡大

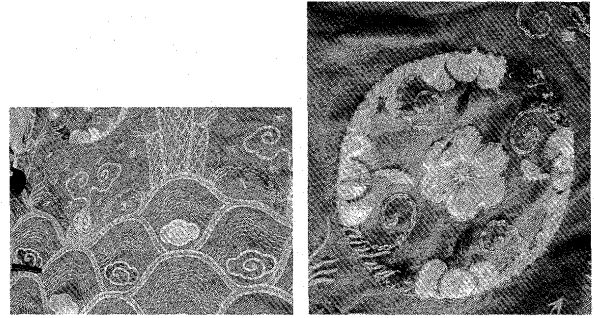


図 8-38 裾部分の拡大

図 8-39 丸文の拡大

②神輿を担ぐ者の衣装

鮮やかな赤の木綿地に絹糸、金糸などで刺繍が施されている。神輿を担ぐためか肩部がひどく損傷しており、刺繍部分も擦り切れて傷みが激しい。胸と背に正面を向いて瑞雲に乗った四爪の龍、前・後身頃ともに腰部に宝珠を挟んで向かい合う二匹の龍、裾部の両側には丸文が配されている。刺繍糸が擦り切れているため丸文の文様は不明確で、中央の「壽」の文字が辛うじて判読できる。着装は日常着のシャツとズボンの上に着用し、腰に黄緑色の帯を結ぶ。この衣装は現在使用されておらず、新しい衣装に切り替えられている。表地の赤の木綿布は綾織で、裏地は総裏の藍木綿である（図8-40~43）。

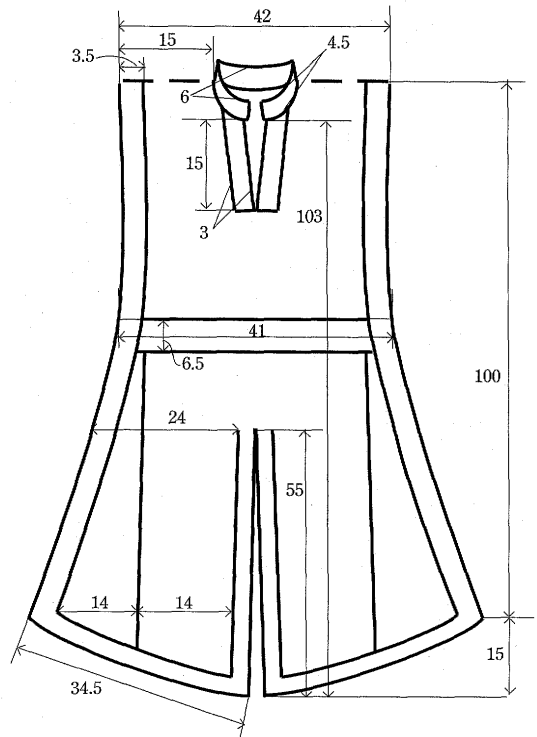


図 8-40 神輿を担ぐ者の衣装



図8-41 神輿を担ぐ者の衣装

の地布に施された刺繍は、絹糸ではなく毛糸刺繍糸で刺されており、全体的にタッチの粗い表現となっている。表地は赤の木綿布で裏地はあざやかな青の化繊布である(図8-44~47)。



図8-44 神輿を担ぐ者の衣装(新)



図8-42 肩、衿部分の拡大

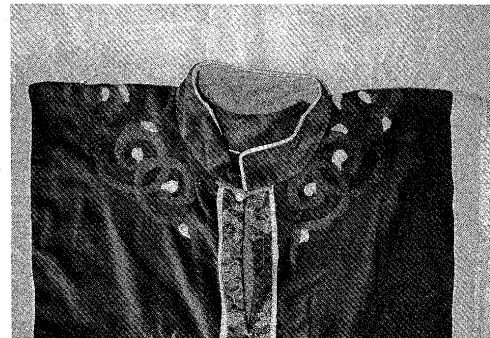


図8-45 肩、衿部分の拡大

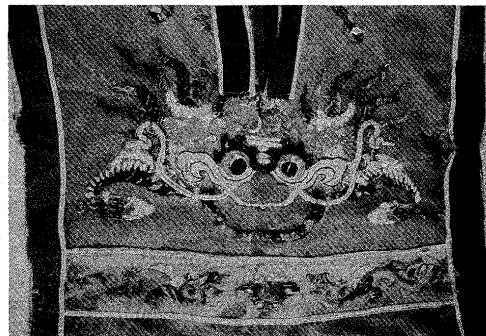


図8-43 胸部分の拡大



図8-46 胸部分の龍の拡大

③神輿を担ぐ者の衣装(新)

1990年代の祭礼の復活に合わせて1992年に新たに調達されたもので、立て衿、袖無しの衣服形態、文様構成などは古い衣装を踏襲している。しかし、赤

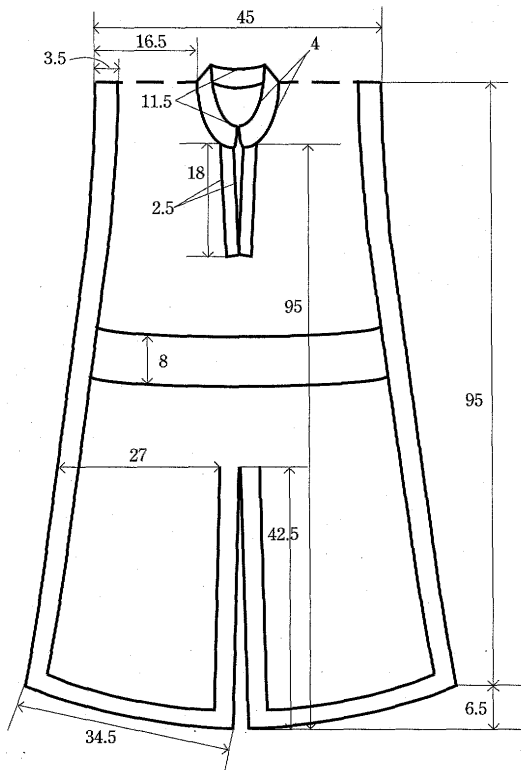


図8-47 神輿を担ぐ者の衣装 (新)

④司祭の衣装

「壽」の丸文が地紋様として織り出された、あざやかな青絹地による単仕立ての衣装である。中国清朝の官服である補服の補子に似た方形の布が胸部と背部に付けられている。文様は向かい合う二匹の行龍で、赤の地布に刺繍糸、ビーズ、スパンコールで縫い取られている。立て衿の衿元から右脇へボタンで留める形態で、袖幅が広く、長い袖丈が特徴的である。着装はゆったりとした白のズボンを組み合わせる (図8-48~50)。

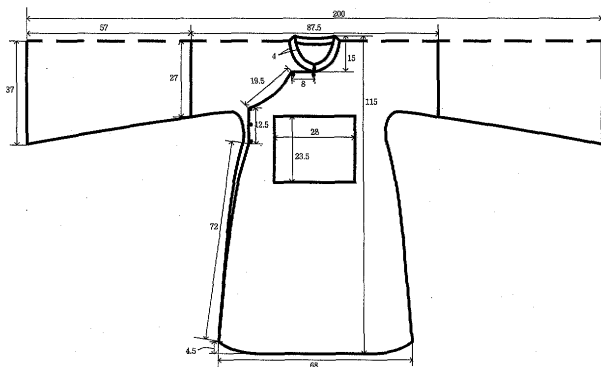


図8-48 祭礼の司祭の衣装



図8-49 司祭の衣装



図8-50 胸部分の拡大

・ドアイザップ集落の祭礼衣装

①神輿を担ぐ者の衣装

現在は祭礼に使われていない神輿の担ぎ手の衣装が、竹で編まれた籠の中にぞんざいに仕舞われている。保管状況が悪いためか損傷が激しく、衣服としての形態をとどめていないものが多いが、合わせて14枚の衣装が確認できた。衣服形態、文様構成はモンファー集落の同種の衣装と良く似ている。赤の地布には綾織の厚地のものもみられ、裏地には藍木綿や生成り木綿などが用いられている。刺繍やアップリケ技法で四爪の龍などの吉祥文様が施されているが、文様構成には何種類かのパターンがあり、裾部に麒麟の文様を配したものなど興味深いものが見られた (図8-51~54)。

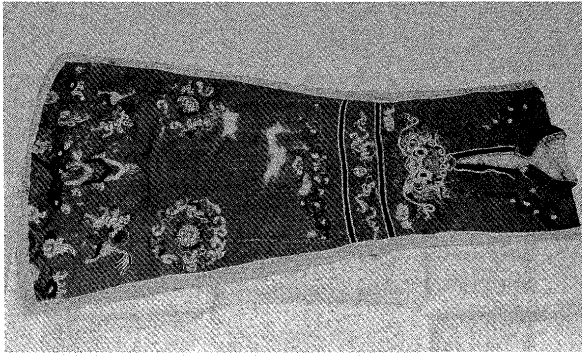


図 8-51 神輿を担ぐ者の衣装



図 8-52 裾部分の拡大

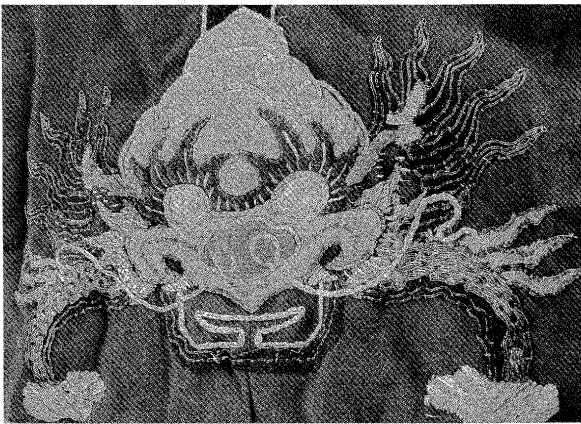


図 8-53 胸部分の拡大

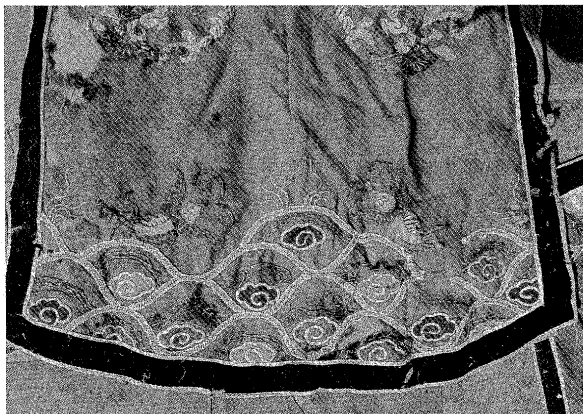


図 8-54 裾部分の拡大

(4) 考察

今回の予備調査期間は短く、必ずしも十分な調査が行えたとは言いがたいが、実際に現地を訪れ、残されている伝統的な衣服について直接見聞することによって得られた成果は少なくないと考えている。同時に、今回の調査において明らかとなった課題と、衣生活調査項目として今後進めるべき課題を整理し、まとめたい。

伝統的な日常着について ドゥオンラム村では、一部高齢者によって伝統的な衣服が今も日常的に着用されており、アオ・ザイの粗型といわれるアオ・ナム・タンの着用状況が確認できた。いずれもベトナムの高温多湿な気候風土や起居動作に適応した伝統的な衣服形態である。

また、その衣服の所在と共に、髪型や被り物も合わせたそれらの衣服の着装法を記録にとどめることができたことは大きな収穫であった。

ドゥオンラム村の高齢者の着装方法は、イエムの上にシャツ型の上着であるアオ・カインを着て、さらにその上にアオ・ナム・タンを重ねて着るが、先行研究⁴⁾には、五枚はぎのアオ・ザイを着用するときには、イエムを付けないで丈の短いシャツ型の内着の上に着用するとあり、着装法に相違が見られる。これは、本来は内着であったシャツ（アオ・カイン）が表着になり、クアンと合わせて日常着として着用されるようになったことから下着であるイエムが必要となり、着装法が変化していったのではないかと推測される。これらの着装法の変化についても今後の調査項目に加え、検討したいと考える。

祭礼衣装について 今回調査した数種の祭礼衣装は、いずれも、衣服形態、文様構成、装飾技法などに中国清朝の服飾文化の影響が色濃く反映しているように思われる。

日常着は茶系統の無地布を主体とした地味な衣服であるのに対して、ハレの衣装である祭礼衣装はあざやかな赤や青などの色彩で、刺繍やアップリケなどの装飾技法により華やかに彩られている。

祭礼衣装には、現在も祭礼に着用しているものと、古くなったため新しい衣装に切り替え、保存されているものがあるが、新しく調達された衣装は、衣

服形態や文様構成は古い衣装を踏まえてはいるが、素材や装飾技法などは簡素なものに代わっている。伝統的な衣文化を次世代に継承するには、素材や装飾技法など詳細に調査をし、現状を可能な限り忠実に再現することが望ましいと考える。伝統文化は一度途絶えると再現の手立てがなく、特に衣服の場合は物としての衣服の保存と同時に、被り物、履物等も合わせた着装法をもつぶさに調査し、生活文化の貴重な遺産として次世代に伝承する必要がある。

(5) 今後の課題

実際の調査を行うことにより、次のような課題が明らかとなった。

伝統的な日常着について 今回の予備調査では高齢者を対象として調査を行ったが、今後は調査対象を次世代へも広げ、それぞれの世代の着用する衣服の調査と共に、高齢者が伝統的な衣服を着用し続ける理由、逆に伝統的な衣服が次世代に受け継がれない要因について聞き取り調査などから解明したいと考える。さらに、先の調査方法に挙げた衣生活の基本的な調査項目に即し、各々のデータを収集し、各世代による着用衣服の相違や、各々の衣服の着用年代を明らかにし、ドゥオンラム村での衣服の変遷を辿っていきたいと考える。

今回所在が確認できたアオ・ナム・タンと同様に、古い衣服形態とされるアオ・トゥ・タン (Ao tu than) 「四枚はぎの長い上衣」は今回の調査では見られなかったが、その所在についても確認したいと考える。

祭礼衣装について 今回の調査では、数例の祭礼衣装の実測と写真撮影を中心に行ったが、今後の調査では各祭礼における衣装の種類と役割、各々の衣服形態、文様構成、装飾技法、製作年代などを具体的に調査し、中国や他のアジアの地域との類例と比較考察をすることにより、ドゥオンラム村の祭礼衣装の性格を明らかにしたいと考える。

日常着と祭礼衣装の関係について 伝統的な日常着と祭礼衣装の予備調査を行った現段階では、各々の歴史的な経緯が明らかではなく、両者の関連性についてはまだ明確ではない。しかし、衣服形態の上では両者には共通点が見られ、日常着と祭礼衣装が密

接に関わり、人々の生活の中に位置づけられていることが推察できる。

今後は日常着、祭礼衣装とも繊維の鑑別による素材の判定・寸法・形態・縫製技法・装飾技法など各専門分野からの詳細な調査を行うと共に両者の歴史的な推移を辿り、日常着と祭礼衣装の関連性について比較検討を試みたいと考える。(谷井淑子・金井千絵)

註

- 1) 現代のアオザイは、腰の上部まで深くスリットが入り、前後の身頃が各1枚の布でできたワンピース形式の長い上着であり、胸とウエストのダーツにより、身体のラインにフィットした細身のシルエットが特徴的である。着装には裾幅の広いズボンを組み合わせる。立て衿の衿元から右脇へボタンで留める形態や両脇のスリットなどはアオ・ナム・タンと同様であるが、ダーツ、ラグラン袖など、洋服の要素が取り入れられている。伝統的な平面構成の衣服と立体構成の洋服を融合した形態を示している。
- 2) 今井昭夫・岩井美佐紀編著『現代ベトナムを知るための60章』、明石書店、2004、の「アオザイ」(237～239頁)でのファン・ハイ・リン氏の論考は「18世紀後半には、現在のアオザイの原型と見なされるアオザイ・キンという長い五身衣が現れた」と記し、道明三保子・田村照子著『アジアの風土と服飾文化』、放送大学教育振興会、2004、に収録される「アオザイの誕生と発展」(46～50頁)のリエン・フーン氏の論考の要約には「1744年中部地方に、アオザイとズボンのスタイルが誕生し、初めのアオザイは5枚はぎで」、「18世紀から19世紀になると(略)5枚はぎの長い上衣を着るのが通例となる」とある。両者の記述から「五枚はぎの長い上衣」である「アオ・ナム・タン」がアオザイの祖型と考えられる。衣服の名称の相違については、地域や時代によるものか衣服そのものが異なるのか検討を要する。
- 3) 前掲2)の論考には、「長い五身衣」、「5枚はぎの長い上衣」などの表現がみられるが、衣服形態を示すものとして「五枚はぎの長い上衣」と表記する。
- 4) 前掲2)リエン・フーン、「アオザイの誕生と発展について」